

大豊建設創立70周年

信頼に応える確かな技術 「新生大豊」として100年企業を目指す

技術研究所完成



技術研究所 哲男氏
内田 哲男氏

「約6・3秒の中央機材センター敷地内の一角約9500平方メートルに建てられたのが同研究所です。建築面積は約473平方メートルで、2階に研修室など、1階に実験室、会議室、技術開発室、オープンア、創意工夫、要望など現場単独でスペースなど技術開発に必要な施設を設置しています。また、必要に応じ施設の増設が可能なヤードと隣接しています。このヤードは、施工研修や実習、ICT施工のシミュレーションなどとして利用可能です」

「土木分野では、当社の創立当初から引き継がれる、ニューマチックケーソンや泥土圧注シールドといった得意技術や開発工法の深化と進化です。建築分野では本研究所に採用された木質構造をはじめとした新工法への挑戦です。そのほか、土木、建築、機電など部門の垣根を越えた研究・開発に力を入れていきます」

「研究所が担う役割は、」

「継続的研究開発と技術の伝承など、本研究所だからこそできる業務活動を確認するものにしていくたいと思います。私はレインボーブリッジをはじめとする橋梁下部工や上部工などの施工、構造設計、環境関連業務、特殊工法総合支援業務に携わってきました。その経験を通して現場密着型の開発の重要性と、アイデア、創意工夫、要望など現場単独での受け皿としての機能の必要性を身をもって感じていました。現場と一丸となって開発を進めて運用・実用性を備えた実効性のある開発業務を



大豊建設は1949年の設立以来、土木・建築の両分野で幅広く施工を手がけ、今年度70周年を迎えました。100年企業を目指し、技術の伝承と進化、技術者の育成に力を入れています。18年は中央機材センター設置、19年は本社ビルリニューアル、そして、技術研究所が完成しました。そんな大豊を支える社員たちに、同社の強みや未来像などを聞きました。



2階 研修室



森川 紘子氏

東京建築支店建築営業部
第一営業課課長代理兼
建築本部開発事業部
開発事業課

「技術研究所設立の経緯は、」

「今後技術を持ったゼネコンが求められていくと考えられたこと、当社に技術研究所がなかったことなどから建築・土木両分野の技術開発ができる研究所の設置が計画されました。技術研究所の1階部分はRC造とCLT(クロス・ラミネイテッド・ティンバー)耐震壁、天井は配筋付製材型枠を仕上げ材として使用し、2階が木質ラーメン構造を採用しており、当社初のRCと木質のハイブリッド構造で木の梁が見えるようになっています」

新しいモノが生まれる場所であってほしい

「同研究所は大豊建設初の木質構造採用物件と聞きました。政府は以前から、日本が有する豊富な森林の保全と有効活用を観点から、間伐材の活用促進に取り組んでいることに加え、国産材の活用を推進しています。その手立ての一つがCLTの採用です。当社は19年の4月から木造プロジェクトチームを発足し、三郷地所住宅業務企画部のCLTユニットや京都大学の五十田博教授に協力いただき、共同研究を進めています。技術研究所は当初S造で建てることと決定していましたが、木質構造を使った最新技術(この技術研究所は新しいモノが生まれる場所であってほしいと願っています。建築、土木など異なる分野が同じ場所で研究され、土木技術が新しい建築技術の開発に生きるクロバティックな展開が起きているのではないかと感じています)100年企業を見据えて、会社と目指すことは、」

「技術研究所に木質構造やCLTが採用されたように、開発された新しい技術を『大豊の新技术』として積極的に採り入れてほしいと感じており、既に採用が決定している次の物件では、より完成度の高いものにしてほしいと思っています」

「このように技術研究所を活用していきたいと考えていますか。」「そうですね、と考えています」



1階 オープンスペース

得意技術の深化と新工法開発に注力

実施していきます。一方で、同業他社や外部機関との協業やオープンイノベーションで新技術の開発力も強化していきたいと考えています」

「18年に完成した中央機材センター(このように連携していくか。」「施工計画や設計をするには現場の状況を見るのが重要で、研究開発も同じです。つまり、多くの主要資機材を取り扱う中央機材センターが隣接していることの優位性は高いでしょう。機電系技術者が配置されている上、整備製作部門も常時稼働しており、得意分野の機材開発や改善など共通の目標を持っています。協働し理解し合いながら確実かつ効率的な開発を進めるためにも、やはり日々のコミュニケーションを大切にしていきたいと思っています」

「開所に向けての思いは、」

「創立以来重視されている技術は、現場の施工と並行して開発・実証する旧機材センター敷地内で実験を重ねたりするなかで、特別な施設に開発されたものにもかかわらず、今なお現場で利用され続けていり、当社初の技術研究所設立とつながっています」

「今後30年の間で、私たちが予想するよりも大きなパラダイムシフトが起こると考えています。IoTやAIなどの技術が当然のように生活に溶け込んでいくでしょう。新たなデジタルトランスフォーメーションを進んでいることでしょうか。これらをコントロールするのが私たち技術者の役目です。創業の理念の一つ『営業性・政治性を過信せず、誠実と努力と技術力をもって他を圧倒すること』と、技術開発魂の伝承と発信を永続的に継続し、内外に技術を提供することで、強靱な国土形成に寄与することで、社会全体に思いやりを持ち続ける企業でありたいと願っています」

大豊建設は令和元年創立70周年を迎えました。

すべてはここから始まった…

創立70周年から100年企業へ、そして続く未来へ

昭和三十二年(1936年)、満州国(当時)の電力不足を解消するため第二松花江に建設が計画された豊満ダム。そこに従事した土木技術者を中心に設立された会社が、大豊建設のルーツです。

『大豊』の社名は大豊満ダムから由来し、そのパイオニア精神と技術はこれからも連綿と受け継がれてゆきます。

豊満ダム
重力式コンクリートダム堤長/1,100m 高さ/91m
堤頂幅/8m 堤体積/220万m³ 基礎掘削量/190万m³

〒104-8289東京都中央区新川1-24-4 TEL.03-3297-7000